114
A 126
10

第三百七十四号

十一葉
大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

千八百七十四年十月十日「ジヤパン、ガゼット」新聞抄訳

抑亦洲ノ新聞局ニ日本ノ事務ヲ報知スル輩ハ自カラ全ク其事情ヲ誤チ常ニ抵觸矛盾セシ誤謬ヲ報告スルニ因リ以テ之ヲ觀ル時ハ欧洲人民ノ真ニ日本ノ事情ヲ解セサルノ怨言モ亦其理ナシトスヿカラス蓋シ近頃「レビユウ、ド、デユウ、モンド」仏國雑報ニ記セル書状ヲ贈リシ人ノ如キハ一事タリ氏故ニ其実ヲ曲クルノ意ヲ懷クヿナカルヘシト雖モ地理暦史上ノ誤解甚タ

多少ノ而メ其誤謬ハ敢テ重大ノ者ト称スルニ足ラスト雖モ真ニ日本ノ事情ヲ解セントスル欲スル讀者ヲシテ疑迷セシム可ク又去ル水曜日ニ刷行セシ一ノ横濱親聞紙ニ掲ケシ「コローヌ、ガゼット」字國新聞抄萃書ノ如キハ日本支那両國間交際ノ模様ニ付キ数十箇ノ誤謬ヲ記載シ而メ其文意ニ就キ記者ノ敢テ故意ヲ狭ムニ非サルヲ知リ得ヘキ方法ナシトセハ故ラ其誤謬ヲ假設セシノ疑ヲ免ル、能ハサル可ク然ルニ此記者ハ横濱ニ住スル人ナリト言フハ亦頗ル驚ク

紙ノ名

ニ堪ヘタリ又長崎ノ「グリッブル」氏ヨリ「ロンドン、タイムス」新聞ニ贈リタル書ハ少許ノ誤ヲ免レスト雖モ尓餘ノ書ニ比スレハ其誤極メテ寡ナシ然ルニ六月十九日附ニテ横濱ヨリ「ロンドン、タイムス」ニ贈リシウヒ、エッチ氏(此人ハ余等ノ暗ニ知ル所ナリ)ノ書翰ハ支那一件ノ概畧ヲ泛然ト評論シ鎖末ノ事ハ措テ之ヲ問フ「ナク而メ其意見ハ「グリッブル」氏トハ全ク異ナレリ偖此書翰ノ記者ハ其他ノ書翰ノ記者ト同シク固トヨリ故ラ事情ヲ曲クルノ悪意アルニ

非レドモ其論説ノ中誤謬頗ル多ク記者モ其後ニ
至リ自カラ已レカ誤ヲ認メタルナル可シ例ヘ
ハ大久保ヲ指シテ出兵ノ黨ナリト云ヘル説、兵
隊ノ其長崎ヲ進發セシ以前江戸ヨリノ命ニテ
差留メラレシノ説ニ子ラール「レゼンドル」ハ「臺
湾ニ兵ヲ送ルノ必要タルヲ常ニ外務卿ニ迫リ
タル」ノ説、日本ヨリ出テシ最初ノ船ハ厦門ニ於
テ薪水ヲ積込ムヘキ旨ヲ支那人ニ乞ヒ支那人
ノ許ルシヲ得タリトノ説、ハ皆前文ニ記スル誤
謬ノ中ニ在リテ若シ果シテ此等ノ説ヲ以テ真
正ナリトセハ日本人ヲ殺害セシ生蕃ヲ罰スル
ハ日本政府ノ意ニ出テシ者ニ非ス外國人ヨリ
之ヲ鼓動シタルニ因ル者ト為シ又日本ノ船隊
ハ政府ノ命ニ抗シテ進發シ又出兵論ノ巨魁ハ最
初ノ手筈ヲ為シタル後チ支那人ニ計ルノ必要
タルヲ初メヨリ解シタルト為シ且ツ大久保ハ
其公ケニ唱フル所ト異ナレル説ヲ竊カニ其心
中ニ懷ケリト為サヽル可ラスト雖モ此等ノ
論説ハ固トヨリ之ヲ保持主張スル能ハサル者
タリ又其書翰ハ此ノ如キノ誤ヲ載スルノミナ

ラス其日附モ亦誤アリテ蓋シ日附ノ誤ノ如キハ敢テ之ヲ咎ムルニ足ラスト雖モ是ニ由テ之ヲ観ル時ハ日本ノ事情ヲ明カニ解セリト自負スル人ノ其誤ヲ免ルヽ能ハザル一証ト為ス可シ例ヘハ右書翰ニハ琉球漂民ノ殺害ニ遭ヒシ二箇年以前ト為スト雖モ其実ハ大ニ二箇年ニ過ト又其書中ニハ日本ニ於テ其事ヲ處置スルニ分キ好機會ヲ得サルニ因リ暫ク之ヲ延バシタル旨ヲ記スルト雖モ其実ハ最初琉球人殺害ノ報、達シタル時ヨリ日本政府間断ナク之レカ處置ヲ為シテ数多ノ設備ノ手續ヲ整ヘシカ蓋シ琉球ヲ以テ日本ノ属地ト確定シ薩摩ニ貢税ヲ納ル、地タルヨリ其姿ヲ一変シテ之ヲ帝國中ノ一藩ト為セシハ即チ其手續ノ一タルヘシ偖又右書翰ノ記者ハ真実ノ意ニ基キテ以テ其書ヲ記セシニ疑セシト雖モ其論説ニ至テハ之レカ確証ヲ缺キ例ヘハ其書中ニ「江戸内閣ノ處置ハ能ク其法ニ合ヒシヲ保持ス可カラスト」云フト雖モ其説ノ証ニ至テハ毫モ之ヲ載スルヿナク又其文中ニ内閣處置中ノ何レノ部分ヲ

措シテ法ニ合セスト為セルヤ又ハ其處置ノ全部ヲ措シテ法ニ合セスト為セルヤ是レ亦明カナラス唯漠トシテ内閣ノ處置ヲ法ニ合セスト称スルカ如キハ敢テ讀者ノ意ヲ満タシム可キニ非ルナリ抑余等ヲ知ル所ノ実事ニテハ是迄政府ノ處置ハ交際上ニ管スルト國内ノ事ニ管スルトノ別ナク概子各國ノ法律家ニ謀テ之ヲ決シタル者ニシテ又支那ノ臺湾統括ノ權ノ事ニ付キ之ヲ言フモ右書翰ノ記者ノ説ニ福建總督ノ嘗テ日本人ハ軽浮ナル説容ノ為メ欺カレタルト云フハ実事ニシテ其以前北京ノ執政ヨリ支那ハ蕃地ヲ統括スル權ナシト云シハ即チ虚言ヲ述ヘタルニ在リト云ヘリ而メ右書翰ノ記者ハ之ヲ以テ自己ノ臆度ニ出ツルト為スヿナク明亮ニシテ疑ヲ容レサル実事ナリト述ヘシカ其記者ハ支那執政ノ其國ニ蕃地統括ノ權ナシト言ヒシハ敢テ疑ヲ容レスト為スト雖モ同氏ハ此不都合ナル偶然事ヲ辨解シテ「如何ナル景況ニ於テモ支那人ノ心中ニハ斯クノ如キ虚言ヲ吐クヲ悔ユルヿナシ」ト云

ヘリ蓋シ惟フニ同氏ノ説ノ如キハ何人ノ心ヲモ感セシムルニ足ラスシテ其言ニ支那官吏ハ嘗テ一旦言々ノ景状タル旨ヲ各外國ノ欽差ニ告ケ終ニ亦之ヲ日本ノ欽差ニ告ケタリシニ是レ一箇ノ虚言ニシテ後ニ右官吏ト同等ノ者全ク之ト齟齬セル景状ヲ述ベシガ此回ハ其述フル所実事ニシテ余等皆之ヲ信セサル可カラト為スハ頗ル怪ム可ク若シ支那人ノ甲事ニ付キ虚言ヲ吐クヲ以テ其習慣ト為サバ乙事ニ付テモ亦等シク虚言ヲ吐キタリト為ス可キノ理ナリ然ルニ右ノ記者ハ横濱ニ住シナカラ支那官吏ノ日本ニ益アル事ヲ述フルニ付テハ虚言ヲ吐キ日本ニ害アル事ヲ述フルニ付テハ敢テ虚言ヲ吐カスト為スニ至テハ余等ノ能ク其理ヲ解ス可カラサル所ナリ然レニ記者一両輩ノ説ハ其普ク世上ニ流布スルニ非レハ此回ノ一事ニ付キ衆庶ノ心ヲ迷ハシムルノ忍ナク唯希フラクハ諸新聞局ノ報告者ハ事実ヲ亮カニ了解シテ之ヲ編輯スルニ意ヲ用ヒ且ツ其日附ニ至ル迄モ之ヲ誤フナカラシムヲ

日本ノ臺湾出兵ノ論

謹ニテ「タイムス」新聞ノ編輯者ニ呈ス

貴君ハ既ニ支那ヨリ日本ノ臺湾處置ノ新聞ヲ得給フタリト虽モ方今江戸及ヒ北京ニ於テ衆庶ノ專ラ注目スル一事ノ論ハ貴局新聞ノ読者ノ為メニハ一箇ノ奇聞ト称ス可キク故ニ此ニ今之ヲ畧記スルモ敢テ贅言タラサル可シ

今ヲ去ル二ケ年以前日本人或ハ琉球人ノ乗リタル船臺湾ノ海岸ニ於テ破壞シ其乗組人ハ殘忍ニ殺害セラレタリシカ此無礼ナル暴行ノ報日

本ニ達セレヤ否日本南方ノ人頻リニ其復讎ノ念ヲ發シタリシカ当時之レカ好機會ヲ得サルニ因リ日本政府此事ニ於ケル處置ヲ一切遲延シ去年支那皇帝ノ條約各國ノ欽差ニ謁見ノ式ヲ許ルセシ時ニ至リ日本ヨリ使節ヲ北京政府ニ送リ初メテ方今兩國間ニ在ル紛紜ヲ惹起スルノ端緒ヲ開キタリ蓋シ其手続ハ頗ル奇ト為スヘキニ因リ此ニ今其大畧ヲ揭クルニ日本使節副島ハ其本國ノ圖計ニ付キ支那ノ疑念ヲ生セシメサル様故ラ偶然ニ「支那政府ノ臺湾ヲ管轄スル権ノ有無ヲ試ミニ支那政府ニ問フヘ」ノ自國政府ノ命ヲ奉シ総理衙門ニ於ケル談話中其通辯官ヲシテ衙門ノ一大臣ニ支那ハ臺湾蕃地ヲ管轄スル權アリヤト問ハシメシカ元來支那人ハ斯クノ如キノ問ヲ受クルニ方リテハ其実事ノ如何ヲ問ハス必ス先ツ否ト答フルノ癖アリテ之ヲ以テ恰モ一時其身ヲ護スル鎧ト為スカ如ク而メ後ニ復タ之レカ要需ヲ受ケサレハ更ニ其鎧ヲ脱セント欲スルヲ以テ其天性ト為シ且ツ支那人ノ心中ニハ虚言ヲ吐クヲ悔

ユルヿアラサレハ当時日本人ノ問ニ答ヘテ支
那ニ蕃地管轄ノ権ナシト言ヒ談話其儘ニテ止
ミタリシカ副島ハ之ニ目リ己レカ要ト為ス所
ヲ得テ速カニ江戸ニ帰リ日本人忽チ其図計ヲ
定メタリ蓋シ当時ノ日本使節ニハ往キニ米國
ノ厦門領事官タリシレゼンドルト云ヘル者之
ニ随従セシカ此レゼンドルハ嘗テ米國水夫ノ
此回日本人ヲ憤激セシメタルト畧相同シキ危
難ニ遭ヒシニ因リ臺湾ノ地ニ到リ数週前日本
ニ来リタシハ当時ノ米國公使デロング氏此回

ノ事ニ付キ相談ヲ為スニ適当ノ人物ナリトテ
之ヲ日本政府ニ吹挙シタル者ナリ此ニ於テ日
本政府ハレゼンドル氏ヲ雇入レテ第二等官ノ
位ト影多ノ俸給トヲ與ヘ副島ノ隨従トシテ北
京ニ赴カシメタリ
古使節帰着ノ後レゼンドル氏ハ臺湾ニ兵ヲ送
ルノ重要タルヲ頻リニ外務省ニ迫リシカ当時
日本政府ハ頗ル其國事多端ナルニ因リ臺湾ノ
一事ハ棄テヽ之ヲ不問ニ措クヲ欲スレヒ其因
循中肥前佐賀ニ於テ騒乱起リ其鎮撫ノ為メ派

出セラレタル内務卿大久保ハ其佐賀到着ノ後
幾モアラスシテ臺湾若クハ朝鮮ニ兵ヲ発遣ス
ルノ約ヲ為サヽレハ動揺スル兵士等ヲ鎮撫ス
ルノ道ナキ旨ヲ江戸ニ電報セリ然ルニ大久保
ハ此事ニ付キ政府ヨリ全権ヲ委セラレ先ツサ
ムライヲ鎮撫シテ直チニ臺湾出兵ノ用意ニ取
掛リ更ニ北京政府ニ一言ノ掛ケ合ナク出兵ノ
為メノ船舶ヲ長崎ニ會セシメシカ其船ノ将ニ
解纜セントスルニ方リ江戸ヨリ差留メノ命ヲ
受ケタリ然ルニ長崎ノ形勢ハ恰モ競馬ノ時初
メテ其馬ヲ乘出スノ稍〻拙ナリト虽モ一旦競馬
ニ掛リタル上ハ早ヤ其馬ヲ駐ム可カラサルカ
如ク政府ノ勢ト虽モ能ク之ヲ止ム可カラス運
送船ハ直チニ厦門ニ到リ支那人ノ許ルシヲ得
テ薪水ヲ積入シ更ニ出帆シテ臺湾ニ向ヒ直チ
ニ兵士ヲ上陸セシメ陣営ヲ造リシニ不日ニシ
テ嘗テ暴行ヲ行ヒシ牡丹人ト小闘シ日本兵痛
ク之ヲ懲ラシメ其後更ニ数回ノ戦闘ヲリテ日
本兵ヨリ江戸政府ニ其戦ニ全捷ヲ得タシハ当
時北京ニ派出セシ使節ハ確乎トシテ談判ヲ為

ス可キ旨ヲ電報セリ

然ルニ支那人ハ日本兵ノ其領地内ニ侵攻セシヲ嫌忌スルノ意ヲ発シ是迄ハ日本人ヲ接セシムルニ故ラ下等ノ官吏ヲ送リ日本兵ノ員数ヲ見積リテ巧ミニ其挙動ヲ窺ハシメシカ終ニ福建ノ総督ヨリ日本兵ノ都督西郷ニ書ヲ贈リテ其本國政府ノ處置ハ万國ノ公法ニ於テ之ヲ許サス又嘗テ北京総理衙門ト副島トノ應接ニ就キ以テ之ヲ觀ルモ亦全ク其理アラサレハ速カニ兵ヲ撤シテ帰國スヘキヲ求メ又其書中ニ若シ日本人支那ニ於テ臺湾全島ヲ有スルノ権カヲ或ハ其権ヲ抛棄シタリト思ハヽ是レ日本人ノ軽浮ナル説客ノ為メ欺カレタルニ在リト云ヒ而ノ支那ニ其管轄ノ権アルヲ証スル為メ種々ノ実事ヲ引抄シ且ツ福建総督ハ日本人ノ處置近頃両國間ニ取結ヒシ條約ノ第一條第三條條第四條ニ反ケル旨ヲ雑シ其書ノ結句ニ日本政府ノ處置ニ因リ両國間ノ和議幾ント破レントスルニ至レル旨ヲ云ヘリ

偖又江戸ノ内閣大臣ハ互ニ一致セスシテ大藏

卿大隈、内務卿大久保、薩摩侯ノ叔父ニシテ嘗テ
リチヤルドソンノ殺害ヲ挑唆シ方今帝國第二
等ノ臣タル左大臣島津三郎ハ交戰ヲ主張シ其
他ノ大臣ハ之ト其説ヲ異ニス又今夕ノ報ニハ
五千人ノ援兵ヲ直チニ臺湾ニ送ラント為スノ
説アレドモ其真偽ハ未タ知ル可カラス
抑、江戸内閣ノ處置ノ法ニ合ヒシト云ヘル説ハ
之ヲ保持スル頗ル難ク又日本人ハ其一旦得タ
ル地位ヲ國辱ナクシテ退クハ全ク能ハサルニ
非ルモ極メテ難カル可ク而タ若シ其地位ヲ退
クヲ肯ヤサレハ終ニ両國ノ交戰ヲ避ク可カラ
サルニ至ル可シ謹言

千八百七十四年六月十九日横濱ニ於テ

ウ、ジ、エッチ誌之

譯

箕作權大内史